

主 題：神の慰め

聖書箇所：列王記第一 19章1-18節

私たちは時に、どうしようもないほど落ち込んでしまうことがあります。残念なことです、私たち人間は、実に様々なことで失望したり、落ち込んだりしてしまいます。でも、神はみことばを通して、「いつも喜んでいなさい。…すべての事について、感謝しなさい。」(Iテサロニケ5：16-18)と教える訳で、神は私たちがどんな状況にいても失望しないで済むように、また、たとえ落ち込んでも、そこからすみやかに回復できるように助けを与えてくださっています。問題は、私たちがその神の助けを、神からの慰めをどのように受けようとしているのかということです。神はどのようにして私たちを慰め導いてくださるのでしょうか？

今日、皆さんとご一緒に学んで行きたい聖書箇所は、前回の続きである、エリヤがバアルの預言者たちとカルメル山上で戦ったその直後のところです。実は、エリヤは私の尊敬する預言者なのですが、彼も私たちと同様完全ではありませんでした。神に用いられて、あれほどの大胆な証をしたにも関わらず、この19章では、エリヤは恐れ逃げ惑ってしまいます。今日、私たちがこのみことばから学びたいことは、私たちが落ち込んだり沈んだりしてしまっている時に、神はどのように私たちに慰め、私たちを霊的に高めようとしてくださるのかということです。それによって、私たちが益々、困難な状況の中にあっても神を賛美することができるようになり、たとえ落胆しても、できるだけ早く本来いるべき場所に戻って行くことができるように願います。

☆神はどのようにして私たちに慰めてくださるのか

1. 常に、私たちの必要を与え続けてくださる 1-8節

まず初めに、神は常に私たちの必要を与え続けるということによって私たち信仰者を慰めてくださいます。神は、私たちが神に喜ばれるように生きている時にだけ必要を与え、そうでない時には意地悪をされる、そのようなお方ではなく、私たちの必要に対して、常に最善をもって応えてくださるお方なのです。I列王記19：1-8を見てみましょう。

- 1 アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたこととを残らずイゼベルに告げた。
- 2 すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。「もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」
- 3 彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、
- 4 自分は荒野へ一日の道のりをはいて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」
- 5 彼がえにしだの木の木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、「起きて、食べなさい。」と言った。
- 6 彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。
- 7 それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いだから。」と言った。
- 8 そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。

◎18章とは大きく変わってしまったエリヤの状態

- ① 3節「彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。」
- ② 4節「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。」

この箇所を読むと、エリヤが18章の時とは大きく変わってしまったことが分かります。18章での勇敢な力強いエリヤではなく、イゼベルを恐れ、自分のいのちのことを心配しています。それなのに、4節では、自分が死んでしまうことを願っているエリヤです。このように、彼は神のみこころよりも自分の計画や願いを優先する、そんな信仰者に成り下がってしまったのです。4節に「彼は、…自分の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。」とあります。18章の時のエリヤとは正反対の姿がここにある訳です。しかし、このようなエリヤの姿は私たちには分からないことではありません。というのは、私たちもこのような信仰の浮き沈みを経験するからです。ある時は熱心に神に従っていても、別のある時には神に対して忠実でなかったり、落ち込んでいたりする訳です。聖書を見ても、これはエリヤだけではありませんでした。例えば、創世記に記されているノア、100年以上もかかって箱舟を作りながら伝道し続けたノアであっても、その後、ぶどう酒で酔っ払ってしまいました(創世記9：21)。また、ダビデもそうです。あれ程、神を愛し、神に忠誠を誓っていたダビデ、自

分を殺そうとするサウル王を「彼は主に油そそがれた方だから…」(Iサムエル記24:6)と言って手にかけなかったあのダビデでさえ、その後、バテ・シェバと姦淫の罪を犯し、殺人まで犯してしまいました。新約聖書を見ても、12弟子の一人、シモン・ペテロが、民の指導者たちに呼ばれ「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」と命じられた時も、彼は「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」(使徒4:5-20)と言って、大胆に神に従うことを宣言したのに、ガラテヤ書2章を見ると、アンテオケで食事中「…割礼派の人々(一部のユダヤ人)を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行った…」(ガラテヤ2:11-21)とあります。このように、信仰者の多くはある種の信仰の浮き沈みといったものを経験するのです。

◎神とは常に変わらないお方

しかし、そのような時、私たちが注目すべきものは神であるということをおぼろげに私たちに教えてくれています。確かに、エリヤは変わってしまいました。しかし、神はどうでしょう？神は、何も変わらずエリヤに接し、彼に必要な導きを与えてくださるのです。5-6節に「5 彼がえにしだの木の下の横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、『起きて、食べなさい。』と言った。6 彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。」とあります。実は、ここで言われている「パン菓子」とは、当時、一般的な人たちが食べていた、どちらかというと貧しいパンのことです。どうして、失意と恐れの中にあるエリヤに対して、主は粗末な「パン菓子」をお与えになったのでしょうか？「パン菓子」ということばは旧約聖書には7回出てくるのですが、実は、同じI列王記17:13にも出てきます。また、「つぼ」(旧約聖書全体で7回)ということばも、同じように、17:12、14、16に出てきます。恐らく、神は、失意と恐れの中にあるエリヤに対して、17章の初めで、エリヤがアハブ王に対して「**ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。**」と言った後、神が不思議な方法で、エリヤと貧しいやもめとその息子を養い、常に守ってくださったことを思い起こさせようとしたのではないのでしょうか。そうすることによって、神は、過去においてエリヤのことを気遣い、彼の必要を満たして下さっただけでなく、常に、エリヤのことを気遣い、全ての必要を与え続けてくださっているということをおぼろげに思い出させようとしているのです。

このように神は、私たちの成長のために、神から見た私たちの最善がなされるために、その時その時に必要なものを与え続けてくださるのです。I列王記19章のエリヤの場合、それは「**焼け石で焼いたパン菓子**」と「**水のはいったつぼ**」(19:6)でした。いずれにしても、様々な問題が私たちの上に襲いかかってきた時、苦しみがある時、悲しい時、私たちは神を見上げて、神がどのように私たちに関わってくださったか(=過去のこと)、また、今もどのように私たちに必要なものを与えてくださっているか(=現在のこと)を考え、そこに目を留める必要があるのではないのでしょうか。また、神が約束してくださっている未来の祝福にも目を留めることも必要です。ヘブル人への手紙11章に記されているノアやアブラハム、モーセといった信仰の勇者たちも、そのようにしてその時代時代において、様々な問題や誘惑に勝利して行ったということが教えられています。

2. 常に、私たちに語りかけてくださる 9-14節

次のポイントに移りましょう。信仰者に対して神が与えてくださる慰め、その第2番目は、常に、私たちに語りかけてくださるということによってです。神はいつ如何なる時でも、私たちに語りかけていてくださいます。問題は、私たちの方がその神のことばに気付かない、あるいは、心から耳を傾けようとしていないことにあるのです。

- 9 彼はそこにあるほら穴にはいり、そこで一夜を過ごした。すると、彼への主のことばがあった。主は「エリヤよ。ここで何をしているのか。」と仰せられた。
- 10 エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」
- 11 主は仰せられた。「外に出て、山の上で主の前に立て。」すると、そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。
- 12 地震のあとに火があったが、火の中にも主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。
- 13 エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい、外に出て、ほら穴の入口に立った。すると、声が聞こえてこう言った。「エリヤよ。ここで何をしているのか。」
- 14 エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

◎神からの問い…「エリヤよ。ここで何をしているのか。」(9, 13節)

誰も経験したことが無いような非常な苦しみ、ストレス、試練を経験したエリヤでしたが、そんな彼に神からの問いがありました。9節と13節にある「エリヤよ。ここで何をしているのか。」というみことばです。エリヤに対して、今の自分自身の状態を冷静に、また、客観的に見つめ直すことを要求されるのです。私たちも、このエリヤのように、感情的に沈んでしまった時、落ち込んでしまった時、冷静になって考え、自分の歩んでいる道、方向を見極める必要があるのです。前回の、I列王記18章からの学びでも見ましたが、本当の信仰とは「天国に行きたいか？それとも、地獄に行きたいのか？」と言われて「地獄になんて行きたくない！」と考えると信じるようなものでは決してありません。自分自身の弱さ、罪深さを認めて、神を第一にすることです。しかし、恐ろしいのは、初めはそのように理解して信仰を持ったにも関わらず、私たちはいつの間にか、神よりも自分の方が上になってしまっていて、神のなされることに対して不満を持ったり、異議を唱えたりし始めるのです。罪の始まりである創世記のアダムとエバがそうだったように…。神を見るのではなく、やがては、様々な問題や自分自身の欲求やこの世の欲などを見てしまうのです。

◎エリヤの答え…「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。」(10, 14節)

神からの「エリヤよ。ここで何をしているのか。」という問いに対するエリヤの答えに注目してください。18章の時のエリヤと大きく変わっている部分があることに気が付きませんか？信仰者としてはあるまじきことです。それは、10節と14節の「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。」というエリヤの発言です。18章で学んだように、信仰とは、その神を信じるが故にその神に主権を明け渡して神に仕えることなのです。18:21で、エリヤ自身が「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」と民に訴えていたにも関わらず、そのエリヤ自身がこんなことを言ってしまうのです。確かに、これは正直なエリヤの気持ちだったでしょう。神に対して熱心に仕えていたのはもう過去のことだと。しかし、本当の信仰者はそうであってはいけないのです。私たちは、常に、いつまでも神である主に仕え続ける者でなくてはならないのです。

◎私たちが真剣に注目すべきことは「みことば」です。(参考：IIペテロ1:16-21)

そんなエリヤに対して主がなしてくださったことは何でしょう？11-12節を見てください。「外に出て、山の上で主の前に立て。」すると、そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。12 地震のあとに火があったが、火の中にも主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。」これらは、一体、何をエリヤに教えたのでしょうか？また、現代に生きる私たちに、どのようなことを語ってくださっているのでしょうか？ここはある意味、非常に難解な箇所です。例えば、11節の「主が通り過ぎられ、」、「主の前で」、「風の中に主はおられなかった」、「地震の中にも主はおられなかった」というのは、一体、どのようなことでしょうか？具体的に、どのようなことが起こったのか、よく分かりません。12節も同様です。しかし、このみことばが言わんとする内容は私たちには分かります。神は、実に、様々なもの、「大風」「地震」「火」などをもって、エリヤに神の持つておられる全能の力、また、その臨在というものを示してくださっているのです。確かに、これらは「神様の力」であり、「神ご自身を現わすもの」であったと言っても良いかも知れません。しかし、このみことばが教えてくれることは、そこに「主はおられなかった」ということです。つまり、私たちが本当に目を向けるべきものは、様々な神の力や、超自然的な奇蹟などではなく、神からの「かすかな細い声」(=みことば)なのです。なぜなら、みことばこそが神からの声であり、明確な神のみこころだからです。しかし残念ながら、私たち人間は、いつの時代であっても、神の起こしてくださる様々な奇蹟を求めてしまう傾向にあるのです。でも、例えば、ここで起こった奇蹟、つまり、大風が山々を裂いたとか、神からの地震や火を私たちが見たとして、そこから、何を教えられるのでしょうか？ある人は言うかも知れません。「神様は怒っておられる！」と…。また、別のある人はこう言うかも知れません。「神様は、今、ご自身の全能なる力を見せてくださった。心配するな！とおっしゃっておられる。」と…。また、別の方は、全く別のメッセージと理解されるかも知れません。つまり、真の神からの様々な奇蹟があったとしても、そこから、私たちは神からの明確な教えや勧めを理解できないのです。だから、神は私たちに対してより明確なこの聖書のみことばを与えてくださったのです。そして、このみことば、つまり、私たちへの神のメッセージが全て完成したから、神からの超自然的な奇蹟というものは必要なくなったのです。これこそが、今、神が超自然的な奇蹟を起こされない理由です。

最近でも多くの集会の勧誘があります。「癒し」や「異言」、「不思議」といったものです。しかし、もし、それらがその不思議な出来事の故に真理であるとするなら、そのような教えは、それこそ、キリスト教以外にもたくさんあります。仏教でもイスラム教でも、いわゆる新興宗教でも、そういったこと

が起こっているという話を私たちは聞きます。

聖書の中で、ペテロはこんなことを言っています。Ⅱペテロ 1：16－21「16 私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。17 キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」18 私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」、ペテロも、様々な奇蹟の目撃者でした。彼こそは、イエスがモーセやエリヤと語っておられたところを実際に目撃したのです。「イエスの変貌」と言われている奇蹟です。彼は何とそこで、父なる神の御声を聞くことも経験しました。しかも、そこには、ペテロ以外には12弟子の内のヤコブとヨハネしかおりませんでした。つまり、この出来事はたった三人しか経験できなかった、凄い奇蹟なのです。しかし、そんなペテロでさえもこのように言うのです。神のみことば以上に、確かなもの、確かなメッセージは他にないと。まさしく、その通りです。だから、私たちはしっかりとみことばを学び、正しく解釈して、神がそこで何を教えようとしてくださっているのかということ、理解する必要があるのです。

3. 私たちに信頼できる「信仰の友」を与えてくださる 15－18節

最後のポイントに移りましょう。信仰者に対して神が与えてくださっている慰め…、その第3番目は、私たちに信頼できる信仰の友を与えてくださっているということです。神はあなたに必要な信仰の友、言い換えれば、良きアドバイザーを与えてくださっている、あるいは、与えようとしてくださっているのです。

15 主は彼に仰せられた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。

16 また、ニムシの子エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。

17 ハザエルの剣をのがれる者をエフーが殺し、エフーの剣をのがれる者をエリシャが殺す。

18 しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」

◎18－19章のエリヤにあった思いはどのようなものだったでしょう？

何度も言いますが、エリヤはこの少し前、大変なみわざに用いられました。しかし、私が強く感じさせられるのは、その時のエリヤの内にあったのはある種の孤独だったということです。そういったことが幾つか示唆されています。18：22「そこで、エリヤは民に向かって言った。「私ひとりだけが主の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。」、19：10、14「エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」』&14節『エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」と、こういう箇所から、エリヤの持っていたであろう孤独感というのが何となく伺えます。確かに、私たちも信仰的にダウンするとこのように考えてしまうことがあります。「自分だけが…」というそんな思いです。そうして、私たちを助けようとしてくれる人に対しても、その手を払いのけることがあります。「しばらく、放っておいて！」と…。エリヤもそんな状態でした。しかし、そんなエリヤに対して神が言われたのは以下の二つのことです。

(1) 15－17節、間違いなく神のさばきは下るということです。だから、神はエリヤに対して、このように言われるのです。「思い煩うな、自分の分をわきまえよ、誰が主権者で誰がさばき主か！」と。

(2) 18節、「わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく」ということばをもってエリヤを励まそうとされました。「あなたには友がいる！同胞がいる！同じ信仰を持っている者たちが、同じような信仰の戦いを経験している人がある」と言うのです。

神はある時、人を導くために別の人を用いられることがあります。このエリヤの場合もそうでしたし、コリント教会の場合（＝パウロ）も、ダビデの場合（＝預言者ナタン）も、パウロの場合（＝アナニヤ）も、ペテロの場合（＝パウロ）もそうです。多くの場合、神は同じ信仰者を用いてその人を慰めてくださるのです。また、ある時には、同じ信仰を持った友を用いて、その間違いを指摘し、正しい方向へと導いてくださるのです。

だから、私たちには交わりが必要なのです。むしろ、率先して交わりを求めることが必要なのです。落ち込んだ時、困った時、信仰深い人に相談することが必要なのです。あなたには信頼できる「信仰の友」がいますか？アドバイザーがいますか？また、あなたは、自ら忠告を求めようとしておられますか？皆さんが信仰をもつ前、自分で聖書を読んで、自分だけで聖書の学びをされましたか？もちろん、そのような方もおられます。でも、多くの方はそうではないでしょう。信仰をもった後はどうでしたか？多くの方が、誰かから、聖書の学びを受けたはずです。同様に、私たちは自分がそのような「信仰のダウン」を覚えたら誰かに相談することです。自分の信頼できる信仰の友に、信仰の先輩に、牧師たちに…。そうして、ともに、みことばを見るが必要なのです。皆さん、あなたがどれほど、「自分は大丈夫！」と思っけていても、絶対に、あなただけでは不十分なのです。ヘブル10：25にはこのように記されています。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」、また、あの信仰の偉人、信仰の強かったパウロでさえも、このように言っている箇所があります。ローマ1：11-12「11 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。12 というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」と。もう1箇所、ピリピ2：19「しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところへ送りたいと、主イエスにあつて望んでいます。」と、あのパウロでさえも励ましは必要だったのです。しかも、その励ましは救われた兄弟間の交わりによるものが「大」でした。箴言27：17に「鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる。」とある通りです。

それは、この信仰の勇者エリヤでさえもそうでした。バアルの預言者たちと戦った時、彼は一人ぼっちでした。でも、神はそんなエリヤにこの励ましのことばを与えられたのです。I列王記19：18「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」と、「あなたは一人ではない」と、「あなたと同じように感じ、同じような弱さを持ちつつも、同じ目標を持って歩んでいる、そんな信仰の友がいる」と、神はエリヤに対して励ましを与えたように、あなたに対してもこのように言われているはず。「あなたは決して一人ではない！」と…。「信仰の友」、それは、ただ単に、同じ信仰を持った友人のことではありません。苦しい時や悩んでいる時に、真剣に相談することのできる「信頼できる信仰者」のことです。もし、あなたにそんな「信仰の友」がいないなら探してみることで。神は必ず、あなたに与えてくださいます。いや、もう与えてくださっているかも知れません。問題は、あなた自身が恥ずかしがっているか、現実から目をそらしてしまっているか、諦めてしまっているか、どのような理由にせよ、真剣に、そのような「信仰の友」を探していないからではないでしょうか？周りを見渡してみてください。こんなにも多くの兄弟姉妹が与えられていて、こんなにも多くの神の家族が与えられているのに、「自分には信頼できる信仰の友がない…」なんて、おかしくないですか？神は必ず、あなたに全ての必要を与えてくださっておられます。それは、生きて行くのに必要な食べ物や着る物に始まり、生きる目的や、その方向性、また、それを知るための、神からのみことばを与え、そして、あなたが励ましを受け、逆に、ある時には、今度はあなたが励ます者となるためにも信仰の友が与えられているのです。神は間違いなくあなたを愛し、あなたの成長のために、その全ての必要を与えて、あなたを励まし、慰めてくださっているのです。